学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

短期大学を拠点とした学生主体の子育て支援活動の意義―ぶんぶんひろばでのサービスラーニングに着目して―

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-05-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田岡, 紀美子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32125/00000099

短期大学を拠点とした学生主体の子育て支援活動の意義
―ぶんぶんひろばでのサービスラーニングに着目して―

田岡　紀美子

抄録

本稿では、本学で行なっている学生主体の「子育て支援」事業においてサービスラーニングにおける二つの根本概念である「省察（reflection）」と「互恵（reciprocity）」について、取り組みの程度とその限界点を考察していくことを目的とした。まずは、本学の子育て支援事業である「ぶんぶんひろば」の実施状況を記述し、これに参加した学生による振り返りの内容を分析した、分析対象とした学生の振り返りは、保護者・子ども非参加型と保護者・子ども参加型で分け、この参加の有無によって得られる学習状況の違いについて言及した。これにより、ある意味当然ではあるが、実際に保護者・子どもが参加して「ぶんぶんひろば」を行うことができたグループの方が、より多くの経験をすることができ、視野の広がり（親子に対する視点を持つことができた）があることがわかった。また、サービスラーニングは経験学習を基盤としたプロセス指向のラーニングスタイルであることを意識した学生に対する学びの支援が重要であることが示唆された。

キーワード：サービスラーニング・省察（reflection）・互恵（reciprocity）・経験学習サイクル・子育て支援力

Ⅰ．研究の背景・目的

本学子ども学科では、子育て支援として０歳～５歳までの乳幼児とその保護者を対象とした「ぶんぶんひろば」を年間６～７回開催している（事業の詳細は次項に記載する）。この「ぶんぶんひろば」は前半を２年生が実施し、後半を１年生が実施することとしており、当日の企画・運営は学生主体で行なっている。このような大学や短期大学を拠点とした子育て支援活動は多く行われており、その実施内容等に関しては、ある程度の研究が蓄積されてきているとされている（宮里ら，2017）。

ここからは、保育者養成校が行う地域子育て支援事業について、サービスラーニングの視点から先行研究をレビューし、研究の限界点等を示した宮里ら（2017）の研究を概観し、本稿において取り上げる研究の背景と目的を示すこととする。宮里らの研究は、保育者養成校で行われている地域子育て支援事業についての実践報告・研究についてレビューし、サービスラーニングの視点から捉え直しをしている。まずは、サービスラーニングの概念についてであるが、これはジョン・デューイの考えに則っており、「経験学習の思想や社会問題に対する市民運動・民主主義の発展の歴史的経緯のなかで1990年代から主に米国で発展してきた社会貢献活動と学習を組み合わせた教育手法であり、プラグマティズムの教育哲学である」としている。また「現在、多様な発展によりその概念は多義的に広がっているが、「省察（reflection）」と「互恵（reciprocity）」の二つを根本概念とする」としており、「地域社会で奉仕活動（サービス）に取り組みながら社会問題についての理解と学習を深める学生の利益と、地域社会にとっても社会問題解決・地域活性化の利益があるという互恵が目指されている」としている。このことから本稿においても「省察（reflection）」と「互恵（reciprocity）」についての取り組みの程度と限界点について考えていくこととする。さらにサービスラーニングにおいてはKolbの経験学習サイクルがよく用いられている。このサービスラーニングにおける経験とは「混沌とした現場において個々人の経験が多様であることが前提であり、その時、その状況においての判断、経験、感情を振り返り認識させ、次の行動に移すという現場に入

りながら学習する過程重視の考え方が見られる」としており、ここでいう reflection とは、経験を内省的に観察し、その結果を抽象的概念化していくことを含めていくことでより学習が促進され、現場で活かされる学習となると考えられていることがわかる。また、さらに学習を進めていくためには、同じサイクルの中にある能動的実験としてさらなる経験をしていくことが重要となる。reciprocity は、保育者養成校で行う子育て支援を活用する保護者と学生の互恵を中心として大学（教員・機関）とあわせて評価が必要であるとしている。ここで、問題となるのが、学生が主体となり行う子育て支援事業がどの程度保護者を視野に入れているのかというところであろう。宮里らはこれに関して、「子育て支援の構造的問題を見過ごした理解をしており、対象理解が不十分でニーズ把握の問題があると指摘しており、そのことにより子ども向けの活動中心になり、活動が楽しかったかどうかの活動中心主義に陥ると理論軽視の状況を警告」されていることを示した。また、保育者養成校が行う子育て支援事業に参加する保護者は、一般的に子育て力のある保護者が多いこと、さらに育児ストレスなどの子育てに関して困難さを感じて参加するのではなく、参加者は経済状況に余裕があり、夫からのサポートがある外的・内的資源に恵まれた女性が多いことも示している。これらのことから、参加する保護者にとっての利点を改めて確認し、互恵関係としてのあり方を考える必要があることがわかる。さらには、高等教育機関が行う子育て支援事業が地域にとってどのような役割を示しているのか、機関が在所する地域の特性を踏まえて考察する必要性のあることが示されているといえる。

宮里らの研究では、学生に求められる「子育て支援力」についても言及されており、子育て支援力を「親とのコミュニケーション力、保育者としての基本的な姿勢等を基盤とし子どもを保育する保育実践力と親の子育てを支援する力、ソーシャルワーク的な視点を持ち展開できる力」の３つで整理されていることを紹介し、「養成校での子育て支援を学習する限界と特性、特に学生と保護者との関係性を捉えながら、学生の到達レベルを設定すること、外部機関との連携については学生が実践することは困難であるが、まずはどのような機関があるかなどを座学と見学でも学ぶことが必要である」と指摘している。子育て支援事業を行う形式によっては、保護者との関わりはかなり制限され、その度合いは変化する。さらに、学生が行う子育て支援事業においてソーシャルワーク的な視点を持ち展開することはとても難しく、課題が大きいことが示されているだろう。そのうえで、先述した保育者養成校が行う子育て支援事業に参加する保護者の傾向からすると、学生に対して求めていることは「支援」ではないことがわかる。そのため、子育て支援事業の中で経験することができる内容としても限界があるだろう。では、保護者な何を求めて参加しているのだろうか、これについては「学生に対する保護者の役割期待はどのようなものだろうか」として「保護者は学生のことを将来の保育者として子育てを学ぶ者として期待と安心感をもって見守っているだけではなく、保護者自身が学生を育てる意識や保護者としての有能感を培うという効果がある」ことを紹介している。また学生に対しては「保護者のことを単純に支援を求めている被支援者としてだけ見る学びになることは危険と思われる」ことも指摘しており、学ぶのは「保護者とのパートナーシップ」と「保護者同士が支えあい「専門家」を必要としない、専門家が介入してはいけない、専門・非専門性を超える世界もあることを知るべき」であることを示唆している。学生には子育て支援に参加する保護者の属性や傾向を理解・把握させる経験も必要であることと地域には子育て支援事業に繋がってこない子育てに困難を抱える保護者がいることを知る機会も提供する必要があると思われる。このことは、宮里らの研究においても未就園児の保護者の実態把握が難しいことが示されており、さらにはそれらの研究が進むことを求めている。また「学生が子育ての喜びと苦しさ、地域問題を学び感じとり、子育て支援事業の社会的意義・意味を理解する学習機会を提供できるか、支援を必要とする社会的弱者を見落としていないか等、省察する必要がある」としている。

以上から本稿では、本学で行なっている学生主体の「子育て支援」においてサービスラーニングにおける「省察（reflection）」と「互恵（reciprocity）」がどの程度可能なのかとその限界点について考察していくことを目的とする。この場合、reflection については、Kolb の経験学習サイクルを参考にし、reciprocity に関しては、「子育て支援力」の３つを参考にする。

Ⅱ.「ぶんぶんひろば」における活動内容

本学では、「ぶんぶんひろば」と題して2013年度より未就学児とその保護者を対象とした子育て支援事業を実施している。本事業は、子ども学科の学生が、対象となる親子が楽しめる様々な子育て支援の催しを企画し、地域課題である「子育て世代の支援（人口減少対策）」の解決に向けて実施しているものである（伊藤（2019），橘（2020））。さらに昨年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況から、対面での実施を見送ることとなり、そうした状況下で、藤本（2021）によって報告された子ども学科２年生を対象にした学習の取り組みとして、「コロナ禍における子育て家庭」を対象としたオンラインでのアウトプット型学習を行なった。ここでの学習内容は、親子が「おうちでぶんぶんひろば」として自宅で楽しめるような遊びを記載したリーフレット作成、及び動画作成であった。2022年度は、これらの状況を踏まえた上で、従来の対面型の「ぶんぶんひろば」を開催するために、感染対策を考えた上で計画を立てた[1]。しかし、実際には、準備ができたのは前半のみであり、その上で親子が参加できたのは１回のみという結果になった。計画内容は、Table 1に記載する。「ぶんぶんひろば」は年間６回から７回実施しており、前半を子ども学科２年生が担当し、後半を子ども学科１年生が担当している。また、各学年を３グループに分けそれぞれが１回ずつ経験することができるようにしており、在籍している２年間では各学生が２回経験することができるようにしている。さらに年間計画（Table 1）にあるように、特別回として子ども学科２年生が２年間の学びの集大成を発表する学修成果発表会もある。これを合わせると全ての学生が３回は経験することができる。ただ今年度は新型コロナウイルスの感染状況拡大により、緊急事態宣言が発出されたことによって、「ぶんぶんひろば」を中止することとなり、実際の実施状況は、第１回は準備・親子の参加なしで録画による実施、第２回は親子参加で実施、第３回は準備のみ、それ以降は特別回を除き中止という状況となった。また第１回から第３回までは２年生担当で、第４回から第６回は１年生担当であるため、１年生については全く経験することができなかった。

Table 1.「ぶんぶんひろば」年間計画

回数	日程	主な内容
第１回	５月19日（水）	ふれあい遊び
第２回	７月14日（水）	身体を動かして遊ぼう
第３回	８月25日（水）	水あそびをしよう
第４回	10月６日（水）	ミニ運動会
第５回	11月17日（水）	さわって遊ぼう
特別回	12月４日（土）	ペープサートや音楽劇の発表（学修成果発表会）
第６回	12月15日（水）	お楽しみ、楽器遊び

次に親子の参加ありで実施できた第２回の「ぶんぶんひろば」についてであるが、参加者は、保護者８名、子ども８名の計16名だった。また保護者の中には、両親で来られたところや子どもについてもきょうだいで参加しているところもあった。参加者（保護者）にはアンケートに答えてもらっており、そのアンケートの項目は、①お住まいの地域について、②ぶんぶんひろばを何で知りましたか、③どのような理由で、ぶんぶんひろばに参加してみようと思われましたか（複数回答）、④今日、参加してよかったですか（その理由）、⑤学生のお子さんへの対応はいかがでしたか（その理由）、⑥ぶんぶんひろばで、どのような活動をしてほしいですか（複数回答）、⑦その他ご意見等の７項目である。ここでは、④今日、参加してよかったですかと⑤学生のお子さんへの対応はいかがですかの項目に着目し、理由も含めて記述する。また、これらについては次項で、サービスラーニングの「子育て支援力」についての考察で再度触れることとする。まず、④今日、

参加してよかったですかとの質問に対して、参加者すべてが、「大変よかった」または「よかった」と回答している。さらにこの回答に対する理由としてあげられているのは、「いろんな遊びをすることができた」、「子どもが楽しそうに過ごしていた。季節にあった飾り付けのテーマでよかった」、「いろいろな企画があり、楽しかったです」、「子どもがすごく楽しんでいた。今までに見たことのない子どもの姿が見れた」、「子どもが喜んでいました」、「たくさん体を動かせて楽しかった。普段体験できないことがたくさんあり、貴重な時間でした」というものだった。また、一部よかった感想というよりは、活動の改善点が記述されているものもあった。それは、「たくさん遊びを用意してくださりありがとうございました。トンネル、楽しそうだったんですが上があいているかすけていると入りやすいと思います」というものだった。次に⑤学生のお子さんへの対応はいかがでしたかという質問に対しする回答であるが、これも「大変良かった」または「良かった」とすべての参加者が答えている。そして、その理由としては、「やさしく、やわらかい雰囲気が子どもに良かった」、「丁寧に対応してくれて良かった。すごい！かわいい！だけでなくもう少し踏み込んで言葉かけしてくれたらより良いと思います」、「やさしく声かけしてくださり、うれしかったです。名前を呼んでいただけるともっと仲良くなれるかなと思います」、「笑顔いっぱいで遊んでいただき、ありがとうございました」、「とても丁寧に対応してくださり安心できた」、「一生懸命で子どもにも優しく声をかけてくれました」、「どの学生さんも笑顔で子ども、親に関わってくださり、とても良かったです。とても丁寧でした」というものだった。

その他、今年度の「ぶんぶんひろば」では第１回目は、準備した内容を参加者はいないままで撮影を行った、第３回は水あそびが活動内容であったため、撮影も難しく準備のみをして終わった。ただ、学生の振り返りとしては、第１回と第２回は行っており、それぞれＡ４用紙１枚分の感想文を記述している。次項ではこの学生の振り返りをもとに、サービスラーニングの「視点」について考察する。

Ⅲ.「ぶんぶんひろば」におけるサービスラーニングの視点（「省察（reflection）」と「互恵（reciprocity）」）による分析

（１）「ぶんぶんひろば」についての振り返り（感想文の分析）

今年度の「ぶんぶんひろば」は先述の通り、第１回が準備をしたのち撮影のみ、第２回が保護者・子どもが参加して実施という状況だった。そのため、分析対象の実施状況を明確にするため、第１回を保護者・子ども非参加型とし、第２回を保護者･子ども参加型とする。また､その状況を Table ２にまとめた。さらに分析するにあたってのリサーチクエスチョンは保護者・子ども非参加型と参加型の学生の振り返りからは、保護者・子ども参加型の方が自身の経験を省察することができ、互恵についても効果が高いという結果が得られるのではないかとした。

Table ２．第１回と第２回の実施状況

	第１回	第２回
参加者状況	保護者・子ども非参加型	保護者・子ども参加型
学生人数（提出された感想文数）	15 人（13）	16 人（16）
ぶんぶんひろば活動内容	ふれあい遊び	身体を動かして遊ぼう
学生が考えたテーマ（指導案）	親子でふれあい遊びを楽しむ	海の遠足

今回得られた学生の振り返りを KH Coder を用いて分析を行った。保護者・子ども非参加型の振り返りと保護者・子ども参加型の振り返りをそれぞれ分析し、抽出語の確認と共起ネットワーク図を作成し、抽出語どうしの共起関係を確認した。まずは、保護者・子ども非参加型の振り返りの抽出語であるが、使用できる総抽出語数は 1,454 である。またそこから上位の抽出語を Table ３に示す。また保護者・子ども参加型の振り返りの抽出語で使用できる総抽出語数は、2,115 であり、そこから上位の抽出語を Table ４で示す。さらに、上位には入っていないが注目される語に関しても「その他・

注目語」として示した。

Table 3．保護者・子ども非参加型・学生振り返り頻出言語（抽出数 10 以上の言語）

順位	語	抽出数	順位	語	抽出数
1	する	128	11	とても	14
2	できる	51	12	実施	13
3	思う	43		準備	11
4	ない	34	13	作る	11
5	なる	27		いる	11
6	ぶんぶん	25		その他・注目語	
7	子ども	23		本番	9
8	ひろば	22		難しい	8
9	ある	21		楽しい	6
	良い	15		残念	6
	自分	15		大切	4
10	協力	15		不安	4

Table 4．保護者・子ども参加型・振り返り頻出言語（抽出数 10 以上の言語）

順位	語	抽出数	順位	語	抽出数	順位	語	抽出数	順位	語	抽出数
1	する	138	11	本番	21		自分	12	19	担当	10
2	できる	63	12	遊ぶ	20		役割	12		作る	10
3	子ども	59	13	関わる	19	17	遊び	12		多い	10
4	思う	56		考える	19		学ぶ	12		いる	10
5	ぶんぶん	40	14	良い	16		楽しむ	12			
6	ひろば	36	15	ボール	15		計画	12		その他・注目語	
7	ある	32		感じる	13	18	保護（者）	11		親子	7
	ない	32	16	見る	13		大切	11		お母さん	1
8	なる	31		環境	13		リハーサル	10			
9	準備	25		良い	13	19	絵本	10			
10	活動	24					流れ	10			

この抽出語からは、保護者･子ども非参加型も参加型も「する」という言葉が突出して多いのがわかる。次に「できる」という言葉が多くなっている。「子ども」という言葉も多いが、保護者・子ども参加型の方が上位になっており、保護者・子ども非参加型では、「ない」、「なる」という言葉が多くなっている。これは、振り返りの原文から考えられることとして、実施する「ぶんぶんひろば」が保護者・子どもが参加できない撮影のみの実施になるということの記述が多かったことが影響していると思われる。また双方ともに「子ども」の語が頻出していることからは、「ぶんぶんひろば」を実施する際に「子ども」に着目していることがよくわかる。また、保護者･子ども参加型の場合は、「保護者」の抽出数は 11 であり、「親子」は７、「お母さん」は１と「親（保護者）」に関連する語が抽出されている。決して多い数字ではないが、保護者対応や保護者との関わりに着目していることが窺える。このことは振り返りの原文にも「親子でというスタンスであるなら活動も親子で楽しめる工夫が必要だったと思いました」との記述があることから、振り返りの中で「親」もしくは「親子」というところを意識したことがわかる。

次にそれぞれの共起ネットワーク図を Table 5 に保護者・子ども非参加型、Table 6 に保護者・子ども参加型を示す。

Table 5．保護者・子ども非参加型の共起ネットワーク図

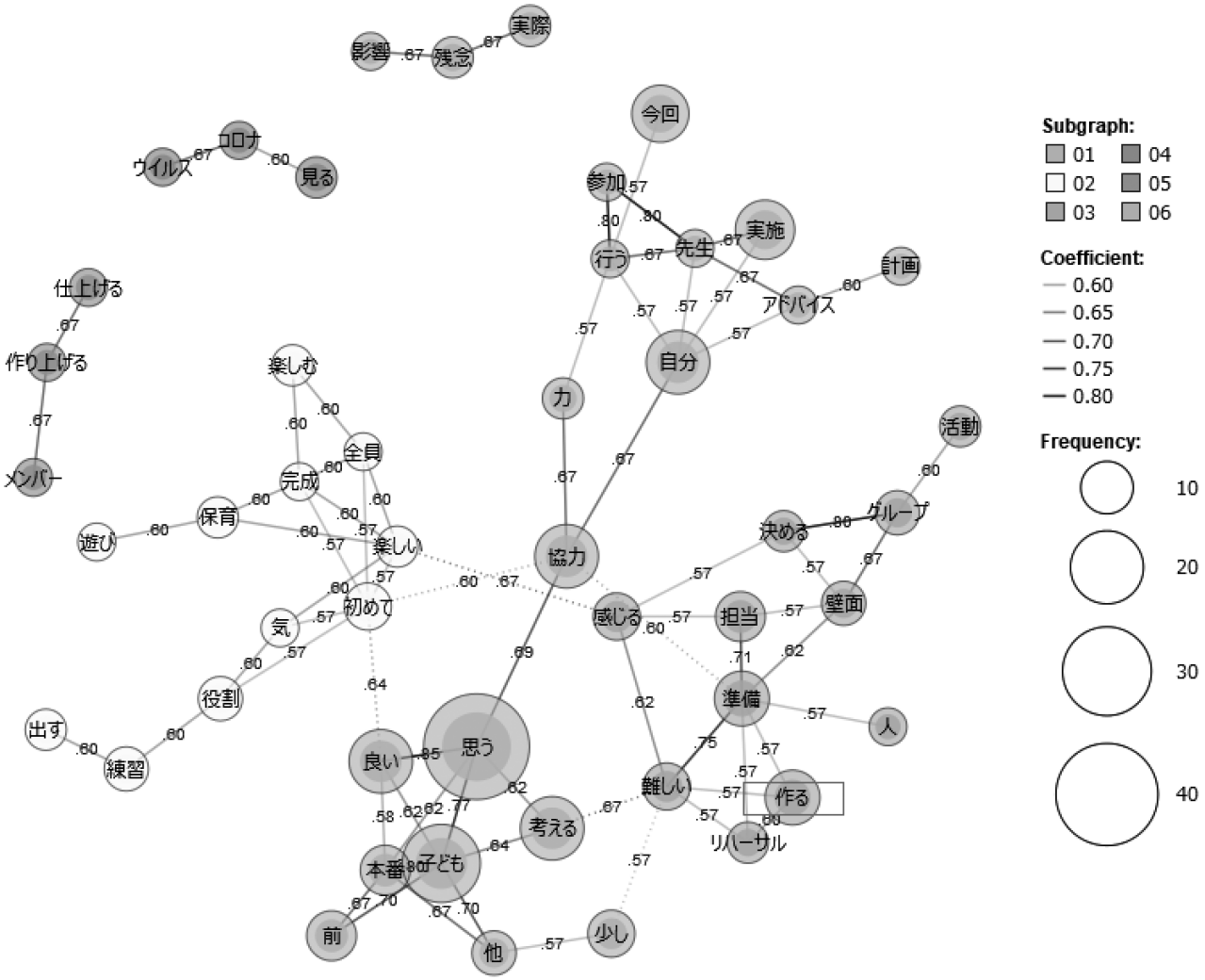
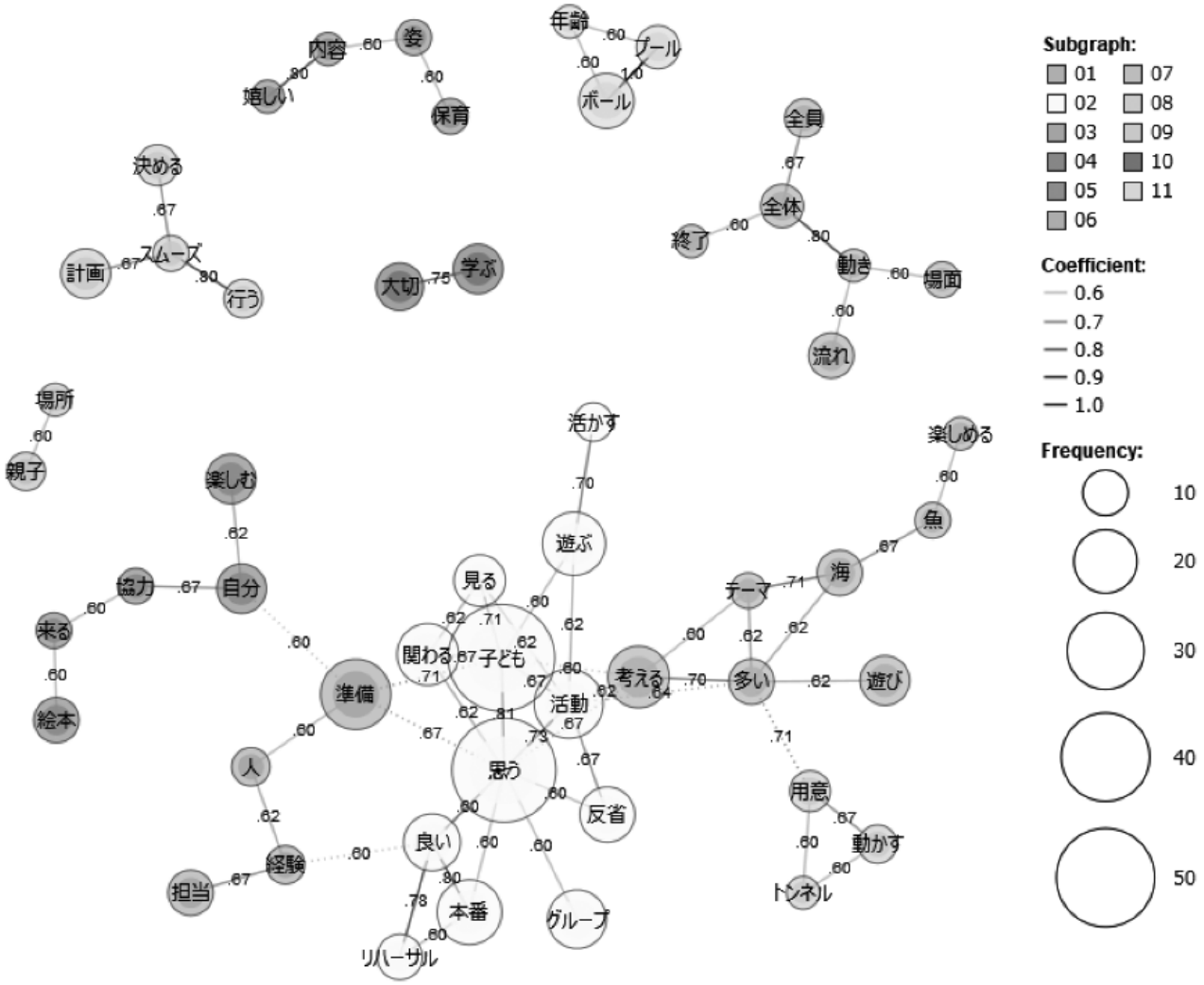


Table 6．保護者・子ども参加型の共起ネットワーク図



まずは、保護者・子ども非参加型で撮影のみを行った学生の振り返りから見えてくるのは、実施状況や実施内容については「子ども」に対する想いや「実施」するにあたり、「先生」の「アドバイス」や「自分」たちの「協力」する「力」などが影響していると考えていると思われる語が共起関係にあることが示されている。さらに、「アドバイス」に関しては、「計画」との関係が強く、これは教員からのアドバイスは実施内容を検討する際に必要であると考えていることが示されているのだと思われる。また、「協力」については、「思う」とも強い共起関係にあり、「思う」は「良い」や「子ども」「考える」「本番」などとも強い共起関係があることから、振り返りとして本番は撮影となってしまったが、子どものことを考えて良いものを行うには「協力」することの重要性を感じているのだと思われる。次に「楽しい」や「楽しむ」に共起関係がある「全員」「完成」「保育」「初めて」などを見ると、今回初めて「ぶんぶんひろば」にグループメンバー全員で取り組むことができたことについて楽しむことができたのであろうことが窺える。それは「作り上げる」との共起関係にある「仕上げる」や「メンバー」の語からもそのように捉えることができるだろう。

次に保護者・子ども参加型の共起ネットワーク図についてであるが、「思う」と強い共起関係にある語として「子ども」があることから、やはり参加する子どものことを考えて、計画立て実施していることが窺える。さらに「思う」には「活動」「反省」の共起グループと「良い」「本番」の共起グループがあり、「良い」「本番」には「リハーサル」を含む共起グループがある。また、「子ども」「思う」には「活動」「見る」「関わる」の共起グループがあり、「子ども」「遊ぶ」「活動」という共起グループもある。ここから本番前にリハーサルをして良かったことや活動などから反省を行っていること、活

動は遊びのなかから子どもを「見る」「関わる」ことについて着目していることがわかる。またテーマについては「考える」「多い」「海」と共起グループがあり、海をテーマに実施内容を考えられていることが示されていると思われる。さらに「全体」との共起関係にある「終了」や「全員」、「動き」についてと「動き」との共起関係にある「流れ」や「場面」から見えてくるものとしては、実際に保護者・子どもが参加したことによって全体の動きや流れ、場面の状況などに着目することができたからこそ出てきた語であると考えることができるのではないだろうか。その他にも「親子」「場所」が共起関係として示されたことによって、「ぶんぶんひろば」が親子に向けた場所であることを少しであったとしても認識していることの現れであることが窺える。

（２）省察（reflection）について

ここでは、Kolb の経験学習サイクルである「具体的経験→内省的観察→抽象的概念化→能動的実験→具体的経験」[2] をもとに「省察（reflection）」について考えていくことにする。サービスラーニングにおける reflection の役割としては、学生自身が自分たちの活動内容を客観的に省察し、保育者としてまたは社会人として求められる技術・行動を抽象的概念化し、次の保育場面等で実践することができるようになることである。さらにここでは、山下（2017）が示すように、サービスラーニングは「ふりかえりレポート、プロジェクトの実施やプレゼンテーション、そして、チームワークのなかでのリーダーシップ性などから評価することができる」としていることから、本稿においても学生の振り返りレポートから本項で「省察」を、次項で「互恵」の効果について考察することとする。

まずは、保護者・子ども非参加型で行ったグループの振り返りでは、「各自の役割に対する責任感」と「自身の役割を超えてグループで協力することの大切さ」、「本番に向けて協働した経験を現場でも活かしていきたいという思い」の３点がポイントとなっているようだった。これは Table ５で示した共起ネットワーク図からも共起グループとしてこの３点が表れていることからも見えてくるのではないだろうか。ただ、Kolb の言う具体的経験が対象者不在のまま行っていることで、今回の経験できるだろう内容からすると、半分の要素のみを経験していることとなり、内省的観察もそこから行われる抽象的概念化に関しても対象者不在のままであることがわかる。そのため、学生本人たちに内省的観察をする力があったとしても、ある程度のところで止まってしまうため、サービスラーニングにおいては保護者・子どもとともに経験することが重要であることがわかる。

次に保護者・子ども参加型で行ったグループの振り返りについてであるが、ここから見えてくるのは、「計画・準備→リハーサル→再計画・準備→本番→本番に対する振り返り」という一連の流れである。ほとんどの学生が、最初の準備段階での役割分担は各担当制によるもので、リハーサルをするまで本番の流れを意識することができていなかったことやリハーサルをすることで本番に向けて細かく流れを決めることができたことについての反省を記述している。また「本番」や「当日」という言葉から始まり、当日の自分たちの動きや子どもの状況（想定外だったことも含め）を記述している。さらに本番についての振り返りを行うことで、今後どうしたらいいのかを検討している。ここからわかることは、具体的経験（保護者・子どもとともに経験）をすることで、そこに至るまでの振り返りと具体的経験をしてからの振り返りを内省的観察として行うことができるということではないだろうか。さらにこの内省的観察を抽象的概念化として組み立てなおすことは、振り返りを丁寧に実施することで行われると思われる。この部分に関しては、今回実施した学年が２年生（ぶんぶんひろばとしては最後の参加）であることから、難しかったが、本来ならば１年生で一度経験し、２年生で２回目を経験するため、最初の内省的観察を抽象的概念化し、２回目の実施で能動的実験につなげることができると思われる。

今回、２つのグループで具体的経験の有無が出たのは、コロナ禍という社会状況による偶然ではあったが、サービスラーニングにより「省察」することは、Kolb のいう具体的経験が重要であるということを示唆する結果となった。このことから、何らかの事情で具体的経験ができない場合は、経験できる方法を吟味し、より実際の状況に近い経験となるように模索する必要があることがわかる。また、サービスラーニングはプロセス指向のアクティブラーニングであり、各段階で

異なるラーニングスタイルが組み込まれていることを教職員、学生の間で認知される必要がある（山下）としている。さらに、佐野（2005）がケースメソッド受容における学習過程の理念モデルを図式化したものによると、経験学習サイクルの各段階において「討論の中の内省」を示しており、これはショーンのいう「行為の中の内省」が行われていることを示唆していることから、サービスラーニングにおいても各段階で学生同士の話し合いや教員からのアドバイスを通して「討論の中の内省」が行われていると考えられる。これらのことを意識的に行えるように教員が学生に対して明確化することを促す関わりをすることで、より効果が高まると考えられる。

（３）互恵（reciprocity）について

サービスラーニングにおける「互恵（reciprocity）」について、ここで改めて記述すると学生の利益（地域社会でサービスに取り組み、社会問題についての理解と学習を深める）と地域の利益（社会問題解決・地域活性化）を目指すことである。本学の実施する「ぶんぶんひろば」においても学生に実践的な学びの場を提供することと大学の使命として地域課題（人口減少問題）の解決に向けて子育て支援に貢献すること、「ぶんぶんひろば」を通して実践的な研究を行い自治体にフィードバックすることの３つを目的としてあげている。またここで示している互恵関係は、大学（教員）、学生、地域（保護者を含む地域社会）、自治体の四者の関係である。

今回、本稿をまとめるにあたり、ここで取り上げる互恵については、分析対象が学生の振り返りであることもあり、学生と保護者の二者間とし、この二者間に影響を与える教員の在り方についての考察を加えることとする。また、先述しているように互恵の分析は「子育て支援力」に着目したいと思う。「子育て支援力」は三好（2016）の「子育て支援力」についてのレビュー論文において３つに整理されている。すなわち、①親とのコミュニケーション力（子育ておよび親育ちへの対応）、②保育者としての基本的な姿勢等を基盤とした子どもを保育する「保育実践力」および「親の子育てを支援する力」、③ソーシャルワーク的な視点を持ち、それを展開できる力である。また、ここで用いる学生の振り返りについては、保護者・子ども参加型で実施することができたグループのものとする。

まず、学生の振り返りから「保護者」「親子」「お母さん」の語が書かれている文章について確認すると、保護者を意識した内容になっているものとしては、９個の文章のかたまりを確認することができた（Table ７）。これらの文章から学生が着目しているものとして、「親子の関わる機会」や「自分たちが親とどのように関わるのか（親とのコミュニケーション力）」、「親からの評価」、「保育者としての自信」があげられていると考えた。

Table ７

- 親子でキャッチボールをしている姿を見て親子で遊び、関わる機会にもなっているかなと感じました。**（親子の関わる機会）**
- ３つ目は児童とだけではなく親の方ともどう関わるかを考えておいた方が良かったかなと思います。本番では児童に対して配慮を徹底していことで親との関わりが少なく、声をかけたりなどする場面が少なかったと思います。親子でというスタンスであるなら活動も親子で楽しめる工夫が必要だったと思いました。**（親子の関わる機会・親とのコミュニケーション力）**
- 保護者の方とのお話をさせてもらったりと貴重な時間を体験させてもらいうれしく思います。（親とのコミュニケーション力）
- 当日を迎え、実際に子どもたちと保護者の方が来てくださるということで、うまくできるか心配でしたが、楽しんでいる様子が見られ、わたしたちも嬉しくなりました。**（親子の関わる機会）**
- 私がしていたエプロンのキャラクターが好きでお母さんと一緒に話しかけてくれた子どもたちもいました。（親とのコミュニケーション力）
- また先生から「参加された保護者の方から～という話を聞きました」と良い感想を教えていただき、改めて頑張って良かったと感じました。**（保育者としての自信）**

・実習では、あまり保護者の方と関わる機会がないため、今回初めて話す機会がありました。まず基本的な挨拶が大切だと学んだし、荷物の置き場やアンケートを書くときなどの声かけや気遣いが難しいと感じました。これが保護者対応というものかと感じ､いかに保護者が安心して子どもが遊べる過ごせる環境を作ることが大切だと思いました。**（親とのコミュニケーション力）**
・11 時 30 分終了予定でアンケートの記入をしてもらっていたら、子どもの遊びへの興味がどんどん出てきて、いつ帰りの用意を促すか、保護者の方に伝えるタイミングはとても悩みました。**（親とのコミュニケーション力）**
・子どもが絵本を読みたがっていたので、その親子に声をかけ、私が絵本を読みました。初見の絵本だったので、間の開け方がおかしかったり、読み方が間違っていたりしましたが、気持ちを込めて読むことができました。**（保育者としての自信）**

※（　）内は、学生が着目しているものとして筆者による追記

また、Table 6 で示した保護者・子ども参加型の共起ネットワーク図において、「親子－場所」の共起関係が示されている。他の抽出語との関連はないため、学生が「ぶんぶんひろば」を計画・実施しているなかで、保護者や対象を親子で認識するという視点が少ないことが示されていると思われるが、一方で、「子ども（原文は児童）とだけではなく親の方ともどう関わるかを考えておいた方がよかったなと思います。本番では子ども（児童）に対して配慮を徹底していたことで親との関わりが少なく、声をかけたりなどする場面が少なかったと思います。親子でというスタンスであるなら活動も親子で楽しめる工夫が必要だったと思います」という振り返りをしている学生もいるため、全く保護者に向けた視点がないというわけではない。本学が行う子育て支援事業は、学生が主体となりその日の活動内容を考えて実施するという方法をとっており、活動内容は、保護者･子ども参加型であったとしてもいわゆる学生発表型の形式となっている。そのため、意識的に保護者と子どもが共に活動する内容を入れなければ、子どものみに焦点を当てた活動となってしまう可能性が高い。そのため、宮里らのまとめた報告にもあるように、「学生が直接母親に関わっていなくても幼児の遊びの支援を人的環境として行うことで母親にも意義ある存在としてとらえられていること等」が明らかになっているとしている。このことは、今回実施した参加者アンケートからも子どもと学生の関わりについて言及している（例えば、「やさしい声をかけてくれてうれしかったです」）ことからも示されていると言える。さらに、活動内容が「子育て支援」としてどのような役割があるのかを計画段階で意識付けすることで可能となるのだろう。また、本学の活動は、当日は受付から終了（帰宅）のアナウンスまでを学生がすべて行うため、活動までの時間や活動終了後にアンケートを記入してもらう、またはその間に子どもを見ているなど様々な場面で保護者とコミュニケーションを取る機会がある。このような場面においても保護者を支援する視点をもち、保護者と子どもの関係性などにも着目できるように学びの視点を伝えていくことが必要となるだろう。これは、学生と教員との相互作用であり、学生のロールモデルとなるような関わりも求められていると考える。

Ⅳ．まとめ

再度、サービスラーニングとは何かについて示すと「サービスラーニングとは、1990 年代後半のアメリカで生まれた新しい言葉で、おおよその意味は「地域諸機関での奉仕活動を通じた経験学習」である。多民族国家のアメリカらしく、コミュニティで自立した成員になることを目的として地域社会への参画による経験から学ぶという、青少年を対象とした「市民性」（citizenship）を育成する実践的方法である」とされている（今津ら・2015）。保育士養成校等で行う子育て支援活動のサービスラーニングとしての意義は、地域社会と一丸となり、将来地域社会に貢献し得る保育者の養成であると考える。また、経験学習の形態をとることからプロセス指向の観点を意識することが重要となるだろう。Kolb の経験学習サイクルのどの段階においても内省が求められ、これが「状況の中の内省」に繋がっていく。保育者などの対人援助職は、目の前の状況に対し瞬時に判断し対応することが求められる。この対応は、それぞれの対象者（保護者や子ども）への継続的な支援や保育（教育）の視点も含められたものでなければならない。子育て支援活動を活かしたサービスラーニ

ングによる学習効果は多岐に渡ると考えられる（例えば、前項で述べた「子育て支援力」の３項目以外にも学生自身の保育者としての自信や社会人としての在り方など）。そのため、学習効果が多岐に渡るならば、それを可能とするためには、教員や地域の協働性と複雑な学習プロセスへの関与が重要なカギとなるだろう。また、学生の地域理解を促す学習プランも必要となる（これは山下、宮里らの研究でも示されている）。これらのことから、今後、筆者自身の研究活動としても経験学習と子育て支援力（特にソーシャルワーク的な視点）の醸成について探求していくことを課題とする。

【謝辞】

「ぶんぶんひろば」を実施するにあたり、本学の教職員のみなさま及び学生のみなさまには多大なご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。また、コロナの状況があり、心配もあったかとは思いますが「ぶんぶんひろば」にご参加いただいた地域のみなさまにも、感謝申し上げます。

註

1　2022年度の「ぶんぶんひろば」開催に向けての感染対策についてであるが、学生の実施日２週間前からの健康観察の実施と関係者全ての毎日の検温と体調管理、参加希望親子については予約制の実施と人数制限を行なった。また、当日は会場に消毒と検温のためのサーマルカメラの設置、風邪症状のある参加者希望者には参加を取りやめてもらうなどの対策を行なった。

2　Kolbの経験学習モデルについて、山下（2017）の説明によると、「具体例（CE）」、「内省的観察（RO）」、「理論的分析（AC）」、「実践（AE）」の４つのスタイルを循環的に体験していくことでより学びが定着するとしている。さらに説明を記述すると以下のようになる。まずは体験の具体例を基に、自分の感情面を客観的に見つめ気づきを高める（内省力を高める）。次に体験を理論的に分析し、次の実施に向けて計画する（内省に加え理論的分析力を高める）。そして、実践し、改善策を練り、問題解決を行う（理論的思考力を基に実践力を身につける）。さらにリーダーシップ力、自主性を高め具体的に動く（気持ちの回復力を身につける）ことを促進させる。これを本稿では、経験学習サイクルである「具体的経験→内省的観察→抽象的概念化→能動的実験→具体的経験」とした。

【参考・引用文献】

宮里慶子･岸本みさ子･串崎幸代･辻ゆきこ（2017）「保育者養成校の行う地域子育て支援事業の捉えなおし―サービスラーニングの視点から相対的に理解するための試み―」『千里金蘭大学紀要』14，73-85

伊藤孝子（2019）「保育士養成課程を有する大学における子育て支援活動～「ぶんぶんひろば」の教育的意義について～」『滋賀文教短期大学紀要』21，51-63

橘那由美（2020）「「子育て支援活動『ぶんぶんひろば』の検証」―学生の自己評価および参加保護者アンケートの分析を通して―」『滋賀文京短期大学紀要』22，67-81

藤本明美（2021）「保育士養成課程におけるオンライン・アウトプット型学習の実践―コロナ禍の「おうちでぶんぶんひろば」の事例―」『滋賀文教短期大学紀要』23，61-73

山下美樹（2017）「サービス・ラーニング：学生の変容と挑戦」『Reitaku Journal of Interdisciplinary Studies』Vol.25，53-67

佐野享子（2005）「職業人を対象としたケース・メソッド授業における学習過程の理念モデル―D．コルブの経験学習論を手がかりに―」『筑波大学教育学系論集』29，39-51

ドナルド･A･ショーン『The Reflective Practitioner』（監訳：柳沢昌一･三輪建二 (2007)『省察的実践とは何か　プロフェッショナルの行為と思考』），鳳書房

三好年江（2016）「保育者養成課程における子育て支援力の評価に関する研究」『新見公立大学紀要』第 37 巻，99-106
今津考次郎・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・白井克尚（2015）「〔実践報告〕教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の試み」『東邦学誌』第 44 巻第１号，211―232
福井逸子・小栗正裕・瀧川光治（2008）「「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究（１）―短期大学へのアンケート調査の分析を通して―」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第１号 135-150
福井逸子･小栗正裕･瀧川光治（2009）「「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究（２）―サービス･ラーニングにおける学生のジャーナルの分析を中心に―」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第２巻第１分冊，65-76
荒木満紀・園川緑・伊藤雅子・今井正江・石井友光（2011）「保育者養成課程における子育て支援事業を通した学生の意識変容」『帝京平成大学紀要』第 22 巻第２号，1-11
樋口耕一（2020）「社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―第２版」ナカニシヤ出版

【資料】

資料①ぶんぶんひろばを実施して（保護者・子ども非参加型）振り返り内容
今日、残念ながら動画撮影のみとなってしまいましたが、とても良い経験となりました。おそらく、実際に子どもたちの前でするよりも緊張していました。私の反省点は、手遊びです。私は「チョキチョキダンス」という手遊びをしたのですが、手遊びをしている最中に何度も止まってしまいました。止まった原因は、出す手を間違えてしまったからです。子どもたちに分かりやすいように、右手のときは左手、左手のときは右手と反対の手を出さなければなければならなかったのですが、「ラララ右手」と歌っているときに左手を出すことに抵抗がありました。その影響で間違えたのだと思いました。またそれを練習したのも本番直前の練習のみでした。もっと事前に反対の手で練習しておくべきだったと後悔しました。全体の動きとしてはとても良かったと思いました。
今回ぶんぶんひろばの準備をして、苦労した点はいくつもあります。１つ目は、ダンスです。振り付けを覚えるのに時間がかかってしまい、リハーサルの日くらいまで完璧に踊ることができませんでした。「わーお！」は、完璧でしたが、「さんぽ」の方が難しく、他の人を見ながら動くことが多かったです。また、２番まですることに変更したので、すぐに覚えました。本番では、２曲とも失敗することなくできたのでよかったです。動きも大きくするなど、目の前に子どもがいる前提で躍り、お手本になれるように頑張りました。２つ目は、壁面構成です。私は、てんとう虫と虹でつかったお花を作りました。てんとう虫は見本を見せてもらい、小さく作ってと言われたので小さめに３～４匹作りました。型がない状態だったので、一から作るのは大変でしたが、うまく作ることができたのでよかったです。お花は、何個も必要だったので、いろんな色を沢山作りました。３つ目は、当日です。今回、コロナの影響で、地域の子どもと保護者を呼ぶことができず、動画を撮る形になりましたが、最初から最後まで全力でしました。声もよく出ていたと思うけど、歌のときは、もう少しだけした方がいいなと思いました。次は子どもと保護者を呼んで、今回以上に良いものをしたいと思いました。
私はぶんぶんひろばを実施して、子どもの前や保護者の方の前で、できなかったことが少し、心残りだった。活動を通して一つひとつのプログラムや流れのつながりを考えたり、説明の難しさなど学ぶことが多かった。私はぶんぶん体操とバスに乗ってというふれ合い遊びを説明するときに少し早口になってしまったり、説明の仕方など少し抜けてしまったりしました。同じ班の人にいろいろ助けてもらったりアドバイスをもらったり、最初はできる気がしなかったのですが、協力して保育をすることや準備をし、計画を立てることの難しさなど学びました。保育士になり、保育を行なってゆく中で、他の先生と協力することなどがあると思う。一人でするのではなく、協力することが大切だと思いました。反省することは、説明のことや自分と違う考えを尊重したりすることです。実習や実際に行なってみるときなど、しっかりと反省点を克服していきたいです。

今回、ぶんぶんひろばを実施してみて、アイデアも準備もさまざまあって楽しめる内容になったと思います。私たちにとっては最初で最後のぶんぶんひろばで、目の前に参加者がいない状態で不安もありました。私は絵本の担当を希望しました。理由として、絵本の読み聞かせは得意だと思い、絵本なら自分自身の力が発揮できると考えていました。しかし、準備をする中で劇を折り混ぜて行うということで背景となるバスの準備やお面作りが必要となり、他の担当の人にも協力してもらうことになるところまで皆で協力してより良いものにしようとする姿を感じられました。リハーサルから本番までは自分自身に問題があると改めて実感しました。先生の指導により最後はどのようにしたら子どもにわかりやすく伝わるのかを考え、皆の意見やアドバイスを参考にすると、間に話を混ぜることになりました。自分なりに考えて話してみようとするものの、上手く話せなかったり、興味を引くには難しいと思いました。カンペを作ったり、話す内容を一緒に考えてくれる人がいて本当に嬉しかったです。「足りない部分を補い合う」ことを実感することができました。今回のぶんぶんひろばを通して自分が得意なこと、苦手なことが改めてわかりました。苦手なことを少しでもこの先できるように努力したいです。

私たちは、コロナウイルスの関係で昨年はぶんぶんひろばに関わることができなかったので、初めてのぶんぶんひろばでした。私は壁面とふれあい遊びを担当しました。壁面では、協力して、考え、子どもたちが楽しい雰囲気で楽しめるような季節を取り入れた良いものができ、良かったと思います。準備やリハーサルもだんだんと完成していき、わくわくしていましたが、やはりコロナウイルスの影響で実施することができませんでした。楽しみにしていたのですごく残念でしたが、録画として実施することができました。初めてのリハーサルでは、ぐだぐだとなってしまい、本当にうまくいくのだろうかと不安に思っていましたが、本番は完璧に楽しむことができ全員で一つになって成功させることができ嬉しかったです。また、子どもたちが実際にいるとまた雰囲気が違ったり、スムーズには進行がいかなかったりなどあったと思いますが、子どもが目の前にいることを想像し、できたので良かったと思います。反省としては、マスクをしていることもあり、後で動画を見ると無表情のように見えてしまっていました。自分の中では笑顔でやっていたつもりでも、子どもたちにはきっと伝わらないので、もっと大きく体で感情を表現したりなども必要だなと感じました。マスクをつけての保育の難しさを感じました。今は、コロナウイルスなどで厳しい状況ではありますが、実際に自分たちで考えたことを子どもたちの前で披露し、実践することは自分の自信にもなるので、これからもぶんぶんひろばを実施してほしいと思います。

ほぼ１週間前までは晴れた日はドアを開けて、外にブルーシートや外でも体を動かしやすいように工夫をしたり、リーダーの子と考えていたけど、当日、ぶんぶんひろばができないとわかってからとても悲しかったです。ですが、ビデオを撮るということを知ってモチベーションを上げることができました。ビデオを撮る直前までどのようにいったらスムーズに進められるか、各役割で決めたことの案を出し合ったり、そのことを他の子たちに伝えたりするなど、本番ギリギリでも焦ることなく全員が理解してから始めることができたことはよかったと思うし、アドバイスをしあって少しの気になったことでも言うことで高め合えるように成長できたと感じました。リーダーと話し合い一番変えてよかったと思うことはマイクを使わなかったことです。マイクを使わないことで楽しさを声の大きさで表現できたことです。楽しいことをビデオでも伝えられるようにマイクを使わない方が良いということに気づくことができたのがよかったと思いました。ですが反省点もありました。当日、すぐに変えてしまったところが少し上手にいきませんでした。「おべんとうバス」の小さな劇でバスを出すタイミングを逃してしまい、練習のときと同じようにはできませんでした。ですが、なぜ練習通りに行かなかったか考えてみたところ、始めに変えてしまったことが多く、少し混乱してしまったのかなと思いました。同じようなミスをしないように予定していたことと変わってしまっても一通りの流れをゆっくり通してみて、わからないところや不安に思ったことがあった場合は、そのときに聞くことが大切だと思いました。副リーダーとしてまとめることや計画を積極的にして、初めてで大変でしたが全員が楽しそうにやっていて、なんとか成功してよかったです。指導案や計画した時間とは合わなかったことや子どもたちがいたらもっと難しかったんだなと思ったらどうしたらいいのかわかりません。

初めてのぶんぶんひろばを体験して、色々なことを学びました。私は壁面を担当しましたが、どんなイメージの物を作れば良いのかメンバーと考えることから始まり、案を出し合い、その中から良いところだけをチョイスして作りました。製作では、手が空いているメンバーも協力的に手伝ってくれて、時間があまりかからずに作り上げることができました。良かったところは、みんなが協力し合うことができたことです。反省点としては、壁に貼ったときに製作の重みがあり、上手く貼りつけられず（長時間もたずはがれてしまう）落ちてしまったことです。完成した出来上がり気にしてばかりいたので、次回作るときには重量なども考えるように気をつけたいと思います。ふれあい遊びはどう説明したら上手く伝わるか、どんなことをしたら親子が楽しめるのかなど難しいと感じました。Aグループのメンバーはみんな協力的だったので、案を決めたり行動するのは素晴らしい所だと思います。実際に親子との触れ合う機会はありませんでしたが、準備したり流れを考えたり、意見交換しながら、又グループで全てを作り上げるという思いが一致して楽しい経験になりました。今回で学んだことを保育の場でも活かせるようにしたいと思います。
一年生のときにはコロナの影響で行うことができなかったため、今回初めてぶんぶんひろばの計画を立て、準備をし、実施しましたが、参加者なしの学生だけでの実施となりましたが、体験することができて良かったと思いました。どのような内容にするのかについては先生のアドバイスを受けながらグループで相談をして決めていきましたが、つながりのある活動にするためにはどのように内容を組み立てていけばいいのかは実施にやったことで知ることができました。それぞれ役割を決めて自分の担当するところの練習をしましたが、壁面に関しては短い期間で仕上げなければならないため、担当以外の人も手伝いながらみんなで仕上げていくことができました。自分の担当しているところだけでなく、それぞれができるところは協力しながらグループで力を合わせて取り組むことができたので、短い期間で、仕上げることができたのだと思いました。計画を立て、準備をして、仕上げたので実施できなかったのは残念でした。自分たちの作り上げたものに対して、実施したときにどのような反応があるのかも知れたら良かったと思いました。実施できなかったことは残念でしたが、グループで協力して作り上げることができたのは、いい経験になりました。
準備の期間は各担当ごとに準備をし、壁面では、手伝えるところは協力しながら進めていくことができました。時間が少なく、間に合うのか少し心配だったところもありましたが、本番に間に合い、また想像以上の出来になったのではないかと思いました。また各担当の中では、打ち合わせができていましたが、活動の間の部分があまり話し合えておらず、そのままリハーサルになり、リハーサルでもなかなか進みませんでした。しかし、だからこそ、みんなで話し合いながら決め、進めることができグループの力が強くなることができたのではないかと思いました。色々なアイデアを出しながらぶんぶんひろばを良くしようという思いが感じました。本番は子どもたちが来ることができなかったので残念でした。ビデオを撮りましたがそれも子どもたちがいないと反応がないので難しかったです。なので子どもたちがいた状態だとどんな接し方があったり、緊張の度合いであったり、他にもどんな予想していないことが起きたりしていたのかもしれないと思うとやはり、実際にやることの大切さがあると思いました。通しでしても30分ぐらいで終わってしまってどうしようと話していましたが、そこまでスムーズに進むこともないのだろうと思いました。しかし、子どもたちと保護者の方がいなくてもどんな反応や子どもの様子、どういう活動がしやすいかなど考えて作っていくことができたと思うので良かったです。
初めてのぶんぶんひろばで不安も大方ですが、ビデオ撮影では無事に成功させることができました。コロナの影響で子どもたちの参加がなくなってしまったことは残念でしたが、みんなと一から試行錯誤しながら流れを考え協力しあったことがとても良く、意味があると思いました。ぶんぶん体操の役割、ふれあい遊びの役割、本を読む役割など様々な役がありましたが、自分だけの役割で終わるのではなく、他の役の手伝いをしたり、アドバイスをしたりする姿がよくみられました。団結力を身につけることができ、とても素敵なチームワークでした。本番では、ビデオでもわかるように笑顔を大切に体を大きく動かし声も大きくすることを意識して行いました。実際に、ビデオにどう写っているか自分の姿を確認し、自分の課題を見つけたいと思います。周りを見ながらふれあい遊びをした際、前髪がとても邪魔で切っておけば良かったと後悔しました。実習中はこのようなことがないように気をつけようと思います。ぶんぶんひろばは様々な力を身につけることができるとても良い行事でした。次のぶんぶんひろばは子どもたちの参加ありで開催できるように願っています。この授業に携わってくださった先生方ありがとうございました。

初めてぶんぶんひろばだったのですが、延期ということになっても尚、いいものに仕上げようとメンバーの方たちが協力しあっって、完成してとても良い作品になったと思います。一人ひとり意見を出し合いどんどん完成に近づいてくる様子を見て私自身も頑張ろうと思えました。私一人では決して作り上げられませんでした。メンバーがいたからこそ頑張ってこれました。延期という形になってしまいましたが、全員が力を合わせてできた作品はとても素晴らしいものだと思います。撮影した動画を見て、お子さんや両親のみなさんが楽しんでくださったら嬉しいです。
今回ぶんぶんひろばを実施するにあたり、コロナウイルスが流行している中、親子で安心してぶんぶんひろばに参加していただく為の対策や親子で楽しんでいただけるよう絵本を読み聞かせする際普通に読み聞かせするだけでなく、お面をつくってお弁当のおかずになりきり、セリフを考えたりし、劇をし、小さい子でも目で見て参加型で一緒に楽しめるように心がけました。また、今回のぶんぶんひろばは、小さい子が多いと先生から聞いていたので、赤ちゃんを膝に乗せ遊べるよう話し合ったりしました。また、時間いっぱい子どもたちに楽しんでもらえるようぶんぶん体操や歌など何度も歌うよう心がけました。結局、コロナウイルスでぶんぶんひろばを実施することはできませんでしたが、今回いかに親子で楽しんでもらえるために、皆でたくさん話し合いを行うことができ、とても良かったです。今回の話し合いを今後に活かしていきたいと思います。
ぶんぶんひろばを終えて一番はじめに感じたことは無事に完成することができた安心感と達成感、やっぱり子どもたちと一緒にしたかったなという寂しさです。壁面や活動の役割を決め、それぞれが責任を持って積極的に案を出し、より良いものになるように協力して取り組むことができていたと感じます。一人ひとりが練習でも本番でもいきいきと動く姿がとても印象に残っています。初めてのことだらけで困ったときもたくさんありましたが、全員がとても楽しく活動できたことがとても嬉しく、良かったなと思います。今回は子どもたちの前で行うことはできませんでしたが、この経験は自分にとってとても力になると思うので、今後の保育に生かしていきたいと思います。また、他のグループのぶんぶんひろばも気になるので、とても楽しみです。

資料②ぶんぶんひろばを実施して（保護者・子ども参加型）振り返り内容
私は、ぶんぶんひろばを行い、用意をする中で保育の環境の大切さを学びました。想像や計画では上手くいくだろうと思っていても、実際に予行練習をしてみるとこの環境だと子どもの注意が他にいってしまい絵本に集中できなくなると考えたり、どうしたらスムーズに次の活動に移れるのかなど相談し合い、先生方にアドバイスをいただきはじめの計画から改善することが多かったです。実際にぶんぶんひろばを開催してみると、子どもたちは笑顔で私たちの用意した遊び場で楽しそうに遊んでいる姿を見てとても嬉しくなりました。体を動かして遊ぼうという内容だったので、滑り台やマット、トンネルを通ったり、楽しそうに体を動かして遊んでいました。また、親子でキャッチボールをしている姿を見て親子で遊び、関わる機会にもなっているかなと感じました。エビカニダンスやぶんぶん体操は、０、１、２歳の子どもには難しかったかも知れませんが、少しずつ、音楽や体操に興味をもってもらい、楽しそう、やってみたいなと思ってもらえるといいなと思います。ぶんぶんひろばを通して安全性や子どもの興味関心を考えながら環境を用意する大切さを学びました。今回の学びを活かしてこれからに繋げていきたいと思います。

今回初めてのぶんぶんひろばを経験して良い点や悪い点が見つけることができました。良い点としては準備期間でははっきりとした役割についておらず、困っている子へのサポートをすることが主にしていたんですが、指導案で困っていること一緒にしてどんな感じで書くか、次までになにをしてくるかなどコミュニケーションを取りながら行えたことや、ぶんぶんひろば当日そんなに子どもと関われていなかったのですが、活動終了後、一緒にブロックで遊びながら関わっている時に自分の関わりでその子どもの笑顔を引き出せて楽しんでもらえたのが良かった点だと思いました。反省点としては準備期間の際はもっと動けたのに指導案のところでずっとやっていたので、準備になるべく参加していくべきだったなと思ったり、周りに任せきりになってしまった場面が多々あり、全体的に自分をみると少し緩かったなと思いました。また、本番のときに入ってきた子どもに関わりにいけなかったり、活動の最中にサメ役をしていたときに何回か触れてしまったこと、役に入りきれていなかったことから自分の体をいっぱい動かせる元気な要素を最大限に引き出せるように準備期間から当日のモチベーションを上げていけるようにしたい。全体を見ていると連携が取れていて台本とは違う動きになったとしても臨機応変に動けていたり、一人ができなかったことを皆でカバーしている場面があって練習とは完成度が違ったので良かったです。子どもの関わり方や準備というのは実習に通ずるものがあると思うので今回のぶんぶんひろばを糧にして残り一回頑張っていきたいと思います。

今回のテーマは海と身体遊びの活動でした。ぶんぶんひろばを実施するにあたって話し合いや流れの改善などを繰り返したおかげで本番ではとてもスムーズに行うことができました。今回のぶんぶんひろばで良かったと思うことは、まず装飾品の魚や魚のお面、海を模した簾などをしっかり作り込むことができたのでとても良い雰囲気が作れたことです。もう一つは、全員で話し合ったことでスムーズなど活動の流れにすることができたことです。先生のご指摘を受け、流れを見直したり、活動の間の動きをより丁寧にすることができました。私が思う今回のぶんぶんひろばでの反省点は３つあります。まず一つ目は全体を通して、児童の反応などの見通しが甘かったことです。リハーサルを行う中で先生にご指摘をいただいてから気づくという場面が多く、またそれら問題点を残したまま本番を迎えると失敗していただろうなと思う点がいくつもありました。流れを考える際に大雑把にしか決めていなかったことが原因であると考えられます。指導案としては、活動の間の動きや様々なケースを考えておくことだと思います。次に二つ目は、あすなろホールの活動をしている場所以外の環境づくりについてです。私たちは活動をしていない場所は顔ハメパネルを設置したくらいで、他の装飾品を用意していませんでした。その場所から装飾をしっかりしていればより児童にとって楽しい環境になったのではないかと思いました。最後に３つ目は児童とだけではなく親の方ともどう関わるかを考えておいた方が良かったかなと思います。本番では児童に対して配慮を徹底していことで親との関わりが少なく、声尾をかけたりなどする場面が少なかったと思います。親子でというスタンスであるなら活動も親子で楽しめる工夫が必要だったと思いました。

ぶんぶんひろばを終えて私はコロナの影響も無く、無事に終えることができて良かったです。前回のぶんぶんはコロナの影響で実施することができませんでした。その上私たちの班もできるかわからず、不安でした。しかし、無事実施することができ、とても安心しました。グループ間については、メンバー一人ひとりが素晴らしいアイディアを持っていたため、それらにとても驚かされました。中でも私が一番驚かされたのは、ボールプールのボールをサメのおやつに見立ててカゴに入れるゲームです。担当の先生からはボールプールは片付けるのがとても大変だと聞いていたため、このゲームのお陰でボールプールの片付けが楽になりました。このような発想は私一人では思いつかないと感じました。環境面では、画用紙で作った魚を壁に飾ったり、部屋の入り口に青色のすずらんテープで海に見立てた暖簾を作ったり、柔らかい滑り台に魚を貼ったりと海の世界観を壊さず、環境を設定することができました。しかし、衛生面で気づいたことがありました。ボールプールで遊んでいる１歳ほどの子どもが、ボールを舐めていました。ボールプールのボールはたくさんあるので、消毒するのは他のおもちゃよりも難しいため、ボールプールはこのご時世には無くてもいいと思いました。ぶんぶんを通して、今後の保育の参考になりました。この経験を実習や保育の仕事についた際に現場で活かしていきたいです。

はじめてのぶんぶんひろばということで緊張しながら挑みました。主活動という大事な役割を担当させてもらっていたので、何度も遊びの内容を考えては、やり直すを繰り返しながら子どもたちが楽しんでくれることを想像して、作ってきました。ぶんぶんひろば当日、元気に子どもたちがきてくれて、子どもの人数と学生の人数にすごく差があり、どう関わっていけば良いのかすごく悩みましたが、楽しそうに遊んでくれる子どもたちの姿を見て、すぐ輪に入ることができました。時間も遅れることなく終わることができ、保護者の方とのお話をさせてもらったりと貴重な時間を体験させてもらいうれしく思います。初めてだったのでわからないことも多く、幾つも反省点はありますが、子どもたちが楽しんで遊んでくれていたことが何よりも嬉しかったです。また12月にぶんぶんひろばがあるので、今日の反省を活かして最大限の力を発揮していけたらなと思います。

Bグループは海をテーマにぶんぶんひろばの計画をしました。事前に誰がどの内容を考えるか担当を決めていたので準備はスムーズに開始できたと思います。私は手遊びと絵本の担当だったのですが、来ていただく子どもの年齢を考え、ぴったりのものを選ぶことができました。順調に進んでいるように見えましたが、リハーサルを行なってみると、先生からご指摘をいただく箇所や反省点が多くありました。その後、グループの人たちで集まり、話し合い、自分たちでどうしたら良くなるのかと改善しようとする姿勢があったので良かったです。前日の準備や掃除も協力して行えました。当日を迎え、実際に子どもたちと保護者の方が来てくださるということで、うまくできるか心配でしたが、楽しんでいる様子が見られ、わたしたちも嬉しくなりました。主活動ではボールプールの担当だったのですが、そこに来てくれた男の子がボールでも遊びたいけど、滑り台や他の玩具も気になっているようだったので、もう少し声かけを工夫し、様々な遊びを行ってもらうことができたらなと反省しました。私がしていたエプロンのキャラクターが好きでお母さんと一緒に話しかけてくれた子どもたちもいました。積極的に関わることができて良かったです。コロナ禍の中でぶんぶんひろばが開催でき、良い経験ができて良かったです。グループで協力すること、活動が変わる際のつなぎの大切さも学ぶことができました。今後に活かしていきたいです。

ぶんぶんひろばの本番を終えて、リハーサルなどでは改善する場所を先生のアドバイスのもとBグループ内で話し合いより良いぶんぶんひろばにするため活動してきました。当日学生より参加している親子の人数が少なかったため、子どもが怖がったりしてしまわないか心配でしたが、ブロック遊び、おままごとなどを通して関わり子ども達にも笑顔が見られたためとても安心しました。最初から最後まで止まることなくぶんぶんひろばを進めていくことができたため本当に良かったと思うと同時に達成感を感じました。何より子ども達が楽しそうに遊んでくれていたことがとても嬉しく思います。

今回初めてぶんぶんひろばをしました。準備から本番の進行まで全て自分たちでするということでとても大変でしたが、グループ全員で協力して成功することができたと思います。反省としては、前半の準備期間で壁面や主活動の内容決めなどに時間を費やしてしまい本番の細かい流れを考えておらず、1回目のリハーサルの際にうまく動けませんでした。また、前半は各役割担任で動いたり、内容を決めたりしていたため、全体への共有ができておらず、後半で「〇〇を作らなければいけない」と少し焦る様子があったと感じました。このように全員が細かい流れの把握ができていなかったことが反省点だと思います。良かった点は、準備から本番まで一人ひとりがどうしたら楽しんでもらえるのかということを考えながら作業を進められたと思います。また、1回目のリハーサルで上手く（スムーズに）進めることができなかったため、もう一度細かい動きや本番での各自の役割を決めようと話し合ったり、授業の空き時間を使ってリハーサルをしたりと何回か集まったことも本番の成功につながったのではないかと思います。さらに、話し合いの際により良い方法はないのかと各事案を積極的に出したいたところも良かったと感じます。今回のぶんぶんひろばを通して、自分たちで計画して実行することはとても大変でしたが、終わった時に達成感があり、参加できたことに嬉しく思いました。また先生から「参加された保護者の方から～という話を聞きました」と良い感想を教えていただき、改めて頑張って良かったと感じました。さらに、実習以外で子どもと関わることは初めてだったので少し不安もありましたが、子どもたち自身が楽しんで活動に参加してくれる姿を見て私も自然と子どもと関わることができました。今回で学んだこともたくさんあったので、実習や今後の保育に生かしていきたいと思います。

実際に子どもや保護者の方と関わることができ、とても貴重な経験になりました。実習では、あまり保護者の方と関わる機会がないため、今回初めて話す機会がありました。まず基本的な挨拶が大切だと学んだし、荷物の置き場やアンケートを書くときなどの声かけや気遣いが難しいと感じました。これが保護者対応というものかと感じ、いかに保護者が安心して子どもが遊べる過ごせる環境を作ることが大切だと思いました。また、本番に臨むにあたって、準備をする中で壁面の担当でした。作る中で、手伝ってくれる人に対して、効率よく作業が進むように、指示を出すことができました。そのため、時間は間に合い、とても良い壁面ができました。リハーサルを一回してみて、あまり上手くいかなかったり、先生からアドバイスをいただいて、そのまま本番を迎えるのではなく、別日にグループで集まり、リハーサルをもう一回して流れや注意点を確認し合うことができたので、本番成功したのではないかと感じました。
ぶんぶんひろばの準備期間では、グループ内で役割を決めて、進めていくことができました。自分の役割を優先としながらも遅れているところ、手伝いを求めているところなど、グループが協力してより良いものにしていくことができたと思います。私は、手遊び、絵本の役割でしたが、テーマに合わせて手遊びや絵本を選び、来てくださる子ども達が楽しんで見てもらう、やってもらえるように考えて選びました。ぶんぶんひろばは当日、子ども達とできるだけソーシャルディスタンスを保ちながら関わり、触れ合うことができたと思います。手遊びでは、子ども達がわかりやすいようにゆっくりしたり、子ども達に問いかけたりしました。子ども達は体や手を動かして楽しく真似をしてくれました。絵本では、「どこにいるだろう？」、「見つけた？」など子ども達が自分から見つけられるように問いかけたりしながらも、楽しんで絵本を見てくれたので良かったです。グループみんなも自ら楽しんで笑顔で取り組めていたので、とても良いぶんぶんひろばになったのではないかと思います。
今回初めてぶんぶんひろばを実施して、メンバー全員で一つのことをやり遂げることがとても大変なことを感じました。準備時間以外に制作をしたり、一回通して見たりして本番に近づいていました。反省点としては、授業以外で残って作業をしている人がいる中、あまり参加できなかったところです。良かった点としては、おわりの会の担当をさせてもらい、本番もうまくできたところです。子どもに近づいてはいけなかったので、子どもと関わるのが難しかったです。主活動の運動遊びのとき、主に子どもはボールプールのところに行っていたので、他のところにいる学生はポツン解いたので、どうしたらいいのかわからずにいました。学生がたくさんいすぎると子どもは怖がってしまうのでどうしたら良いのか難しく思いました。思ったより時間が余ってしまい。子どもと関わる時間が増えましたが、最後は少し追い出す形になってしまったのが、良かったのかなと思いましたが、長いようであっという間のぶんぶんひろばでした。リハーサルに比べて、とてもよくできたと思いました。全員で一つのことをする達成感がありました。とてもいい経験になりました。

私たちのグループは体を動かして遊ぼうを「海」をテーマに企画・実施しました。無事に終了できるか準備開始からぶんぶんひろば終了まで常に不安がありましたが、全員で自身の役割プラスαの動きが準備中・本番中にあったため問題なく終えることができました。実施して、反省が多くありましたが、学びも多くありました。反省は、準備のスケジュール計画についてです。準備が完了したのがリハーサルの直前で、流れや当日の役割など本番ができる状態になったのが、本番２日前でした。準備を完了させる計画が甘かったため、ギリギリになってしまったと反省点となりました。計画を立て始めた時から全体の流れや制作するもの、当日の役割など、完成予定と全体図を意識して計画を立てるべきだと思いました。計画を適切に立てることができれていれば、もっと余裕を持って準備が完了でき、環境構成をより工夫する時間にあてれるため質を高めることができたと思いました。最初の計画を細かく詳細に決める大切さを学びました。また、本番で子どもと関わる機会が少なかったことが反省です。全体のタイムキーパーと音楽等を行いました。スムーズな進行のための役割でしたが、もう少し子どもと関わる時間を増やすべきだったと思いました。担当の役割を効率的に行い、子どもと関わる時間を作るべきだったと思いました。良かったところは、当日の対応です。子ども達の姿や全体の様子・流れから、臨機応変に変更し柔軟な対応ができました。主活動の最中に遊戯の混み具合などから遊戯の位置を変更したり、子ども達の様子から休憩を晴らす・そのための活動の変更をグループ内で確認しながら行いました。計画段階で万全の用意し、あらゆる想定をしていたとしても、子ども達の姿などから変更が必要となる場面があると実感しました。そんな時でも落ち着いて考えて、冷静に行動できることが大切だと学びました。また変更等の対応が必要となったときも、一人で決めるのではなくグループの人、リーダーと相談してチームで動くことの大切さを学びました。ぶんぶんひろばは、模擬保育に近いものなのかなと思っていましたが、終えてみるとチームで保育する、個人の得意、不得意を補っているところから、小さな園現場に近いものだったと感じました。職員間の連携と言葉ではイメージしにくい部分を経験することができ就職前に貴重な体験ができました。

今回約１年ぶりのぶんぶんひろばということもあり、全体的に不安を感じることが多かったです。第１回のＡグループのぶんぶん広場が中止となり、自分たちも開催できるのかと思いながら準備を進めました。海の遠足というテーマを設定し、どんな遊びが身体を動かして遊ぼうという条件に合わせることができるのか幅広い年齢を想定してその範囲で何が適当かをたくさん話し合いました。実習終了後の準備ということもあり全員が〇歳児ならこれは楽しめる。やこんなものがあるといいんじゃないかと自分たちが実際に見てきたこと、体験してきたことを共有することでいろんなアイデアを出すことができました。どうすれば海の雰囲気を出すことができるのかを考え、入口にすずらんテープを裂いたものを飾ったり、室内の壁、小道具に魚を貼り付けるなどして世界観を作ることができたと思います。コロナの影響で参加人数が限られている状況の中で、一人の子どもに対しての学生の数が多くなってしまったり、子どもが揃うまでの間、できることが見つからず、手が空いてしまった人が多く見られたときもありました。自分自身、総合司会を務める中で、その場からあまり離れられず環境構成が切り替わるときや入ってこられたときの声かけがワンパターンになってしまったなと感じました。主活動となる探検では予想以上にボールプールが人気でトンネル、マットにはあまり人が集まらなかったので、当日になってみないと何の遊びに集中するのかがわからない中、それぞれ持ち場での声かけに集中して行えたと思います。思ったより早く活動が終わり、アンケートの記入をお願いしましたが、どの保護者さんも書きにくそうにしておられたので、バインダーや机の用意はあったほうがよかったかなと反省しました。また11時30分終了予定でアンケートの記入をしてもらっていたら、子どもの遊びへの興味がどんどん出てきて、いつ帰りの用意を促すか、保護者の方に伝えるタイミングはとても悩みました。最後の片付けまで次回に活かせる方法を知ったりすることができたので学びに繋がる活動となりました。

ぶんぶんひろばを実施して、年齢に応じた遊びが大切だということが学べました。今回は０～２、３児が対象だったので、その年齢の子どもに合わせた遊びができるように準備しました。準備の時間では、主活動の担当の人と一緒に遊びを考えたり、道具を作ったりしました。「身体を動かして遊ぼう」という題材と、テーマである「海」を合わせた遊びを考えました。全ての年齢の子どもが安全に楽しめる遊びをつくることように心がけました。教育実習で、子どもは視覚からの情報が大切だということを学んだので、それを活かしてトンネルや滑り台に魚をつけました。本番では、メインの「海の探検」のときにボールプールで遊ぶ子どもが多く、マットやトンネルに子どもがほとんどいない時間がありました。その時に、どのような声かけをしたらマットやトンネルなどでも遊んでもらえるのか考えることができませんでした。好きなところで自由に遊んでもらうことが一番だけど、全ての場所で様々な身体の動かし方を体験してほしいと思ったので、事前に予想して対策を考えておくべきだったと思いました。エビカニクスは親子でリズムをとりながら楽しんでもらえたので、よかったと思いました。ボンボンを気に入っている子どもがいたので、子どもの分も用意するともっと楽しめたと思いました。ボールをカゴに入れる活動ではゲーム感覚で片付けができるのでとても良いと思いました。全ての子どもがケガなく、楽しんで遊ぶことができていたと思います。この経験を実習や教員になったときに活かせるようにしたいです。

ぶんぶんひろばを終えて、学んだことがたくさんありました。私は、はじまりの会を担当しました。その上で、聞き取りやすいようにハキハキと話したり、子どもに目線を合わせながら話したりすることを心がけました。来た子どもから、一緒に遊んでいるときに、子どもが絵本を読みたがっていたので、その親子に声をかけ、私が絵本を読みました。初見の絵本だったので、間の開け方がおかしかったり、読み方が間違っていたりしましたが、気持ちを込めて読むことができました。別の場面でも遊びたい遊具で遊べなくて泣いてしまっている子に絵本を読むなどして気を紛らわすことができました。ぶんぶんひろばで、実際に子どもと関わることで、臨機応変に対応することや子どもに寄り添うことの大切さに改めて気づくことができました。この学びを次の実習で活かしていきたいです。

初めてぶんぶんひろばをやりました。最初は、初めてなので、不安な気持ちもありました。その気持ちはぶんぶんひろばの準備をしていくうちに小さくなりました。同じグループのメンバーと協力をしてぶんぶんひろばに来てくださる保護者やその子どものためにも少しでも楽しんでもらえるように考えました。コロナがなかったらもっと参加者が増えて距離も近くなり、マスクもしなくて良い環境だったけど、今の現状コロナウイルスが流行っている中でのぶんぶんひろばの開催で参加者も制限され、子どもとの距離もできるだけ離れ、マスクも必要の環境だったけどグループのメンバーと協力をして保護者や子ども達が楽しめたといえるぶんぶんひろばの環境を作れて本当によかったと思いました。反省点は、自分と子どもの距離が近かったことだと思います。マスクをしているとはいえ、もう少し距離を取ったほうがよかったと思いました。他には、準備の段階でプログラムがごちゃついたことです。しかし、グループのメンバーと話し合って本番までにしっかり計画を立て直せてよかったなと思いました。

田岡紀美子　子ども学科講師・社会福祉学